

# 平安文学におけるかな書道

——『紫式部日記』にみる書道観——

南 條 佳 代

## 【抄録】

『源氏物語』や『紫式部日記』において、書について多くの記述がなされている。これは、書に造詣が深い紫式部ならではの書道観として、この時代の書のあり方や様子を表わしている。しかしながら、それが実際の書道史における書風、特になかな書道としてどのような文字だったのだろうか。

平安時代における書の捉え方、扱われ方について、『紫式部日記』の中で述べられている紙・道具・書状・書きぶり・書風・書写方法を中心に、『源氏物語』や『紫式部日記』の中の清少納言批評を踏まえ、その時代背景、文化としての書道の位置付けを明確にしていくものである。

キーワード：紫式部日記、源氏物語、清少納言、書、かな

## はじめに

『源氏物語』や『紫式部日記』において、書について多くの記述がなされている。これは、書に造詣が深い紫式部ならではの書道観として、この時代の書のあり方を表わしている。しかしながら、それは実際の書道史における書風、特になかな書としてどのような書風だったのだろうか。

平安時代における書の捉え方、扱われ方を文学作品を中心に、その時代背景、文化としての書の位置付けを見ていきたい。特に、『紫式部日記』などが書かれていた頃のかな文字の書風は、万葉仮名、草仮名、平仮名とが混在し、変化していた過渡期の時代である。

このように、かな文字としては、まだ過渡期であり絶頂期に

至っていないが、その時代の中で、紫式部をはじめ多くの女性  
が使う文字として、かなが使われるようになったのである。そ  
のなが、文字としてだけでなく、書道文化として扱われるよ  
うになったのはどうしてだろうか。『紫式部日記』を中心に、  
明確にしていく。

## 一、『紫式部日記』にみられる書

『紫式部日記』には、書に関する多くの記述がある。まずは、  
紙・道具・書状の形や見た目についての記述を見ていきたい。

(番号は、本文記載順 頁数は『新編日本古典文学全集26 紫  
式部日記』<sup>(1)</sup> 小学館一九九四年に拠る。以下同じ。傍線は筆者。)

① 暗うなりにたるに、たち帰り、いたうかすめたる濃染紙に、  
(一五二頁)

② いろいろの紙選りととのへて、(一六七頁)

③ よき薄様ども、筆、墨など、持てまゐりたまひつつ、御硯  
をさへ持てまゐりたまへれば、(二六八頁)

⑥ 白き色紙つくりたる御冊子ども、古今、後撰集、拾遺抄、  
その部どもは五帖につくりつつ、侍従の中納言、延幹と、  
おのおの冊子ひとつに四巻をあてつつ、書かせたまへり。  
表紙は羅、紐おなじ唐の組、かけこの上に入れたり。(一  
七四頁)

⑦ 延幹と近澄の君と書きたるは、さるものにて、これはただ、  
け近うもてつかはせたまふべき、見知らぬものどもにしな  
させたまへる、いまめかしうさまことなり。(一七四頁)

⑧ 黒方をおしまろがして、ふつつかにしりさき切りて、白き  
紙一かさねに、立文にしたり。(二八一頁)

このように、①は「濃染紙に」という時雨の空に合わせた、  
濃い紫の雲形のぼかし染めの紙、また、②の「いろいろの紙選  
りととのへて」のように、さまざまな料紙があった。さらに、  
③の「薄様ども」という上等の鳥の子紙や、⑥の「白き色紙」  
に書き、「表紙は羅、紐おなじ唐の組、かけこの」は、冊子の  
表紙は羅という薄織の絹で、紐も同じうす絹の唐様の組紐を使  
い、その紐を外箱の縁にかけてその中に、はまるように作った  
懸子という箱に入れたのである。⑧は、「白き紙一かさねに、

立文にしたり」という白い紙二枚を一重ねにした、正式の書状の形で、手紙を礼紙で巻き、その上を白紙で縦に細長く包み、上下をひねり封、おり封、乗り封などにしたものである。さらに、⑦の「見知らぬものどもにしなさせたまへる、いまめかしうさまことなり」は、見たこともないみごとな装丁が、現代風で様子が変わっているとしている。

次に、書きぶりを表わしているものについて見ていく。

④ よろしう書きかへたりしは、みなひきうしなひて、心もとなき名をぞとりはべりけむかし。(一六八頁)

⑤ 書きざまなどさへいとをかしきを、まほにもおはする人かなと見る。(一七一頁)

⑥ 延幹と近澄の君と書きたるは、さるものにて、(一七四頁)

⑩ いとこそ艶に、われのみ世にはもののゆゑ知り、心深き、たぐひはあらじ、(一九三頁)

⑪ いと御覽ぜさせまほしうはべりし文書きかな。(二〇〇頁)

⑭ 恥づかしさに、御屏風の上に書きたることをだに読まぬ顔をしはべりしを、(二〇九頁)

このように、④の「書きかへたりしは」は、草稿本に手を入れて、まずまず見られるように書き直した清書本で、⑤の「いとをかしき」という書き様までが実に趣深いことや、⑦の「さるものにて」は、立派なもので、⑩は、「艶に」というはなやかさを表わし、⑪は、「御覽ぜさせまほしうはべりし文書き」で、お目にかけたいような、高貴な人を相手とした書きぶりのことで、⑭は、「御屏風の上に書きたることを」という屏風絵の画賛の漢詩文や和歌のことを述べているものである。さらに、書風について見ていく。

⑨ 宮のふたに葦手にうきいでたるは、日陰の返りごとなめり。文字二つ落ちて、(一八三頁)

⑫ 和泉式部といふ人こそ、おもしろう書きかはしける。されど和泉は、けしからぬかたこそあれ、うちとけて文はしり書きたるに、そのかたの才ある人、はかない言葉の、にはひも見えはべるめり。(二〇一頁)

⑬清少納言こそ、したり顔にいみじうはべりける人。さばかりさかしだち、真名書きちらしてはべるども、よく見れば、まだいとたらぬこと多かり。(二〇二頁)

⑮宮もしのびさせたまひしかど、殿もうちもけしきを知らせたまひて、御書どもをめでたう書かせたまひてぞ、殿はたてまつらせたまふ。(二一〇頁)

これらは、書風についてであるが、⑨は、「葦手に」という水辺に葦の生えた絵を描き、水流や葦にまぎれて仮名を図案化し歌を書き入れた書風のことで、「文字二つ落ちて」は葦手書きのために、図案化しにくい文字があるため二つ抜け落ちてしまい、⑫は、「文はしり書きたるに」という気軽に続けた連綿線で、⑬は、「真名書きちらして」という清少納言が、利口ぶって漢字を書き散らしている様子のもので、⑮は、「御書どもをめでたう書かせたまひてぞ」という漢籍などを立派に書いていることを表わしている。

さらに、この時代の書写方法が述べられているものについて見ていく。

②いろいろの紙選りととのへて、物語の本どもそへつつ、と

ころどころにふみ書きくばる。かつは綴ちあつめたたむを役にて、明かし暮らす。(一六七頁)

⑥白き色紙つくりたる御冊子ども、古今、後撰集、拾遺抄、その部どもは五帖につくりつつ、侍従の中納言、延幹と、おのおの冊子ひとつに四巻をあてつつ、書かせたまへり。表紙は羅、紐おなじ唐の組、かけごの上に入れたり。(一七四頁)

この時代の書写方法として②の「いろいろの紙選りととのへて物語の本どもそへつつ」という色とりどりの料紙を選びそろえて、物語を写すためのものと本を添えては、「ふみ書きくばる」という書写を依頼する手紙を書いたり、「かつは綴ちあつめたたむるを」といっぽうでは、書写したものを綴じ集めて整理するのを仕事にして日を送っている。ここでは書写作業のことを述べ、⑥は、「白き色紙つくりたる御冊子ども、古今、後撰集、拾遺抄、その部どもは五帖につくりつつ」という白色紙を綴じた本の類は、『古今集』『後撰集』『拾遺集』などで、その三歌集を各五帖に分けて作り、「おのおの冊子ひとつに四巻をあてつつ、書かせたまへり。」という歌一帖に四巻ずつ書いたのである。このようにして歌集をまとめ、書写をした。

これらのように、『紫式部日記』において書に関する多くの記述がある。しかしながら、それは書風など文字そのものにおいてより、紙・書きぶりについての記述が多い。これは、日記という事実に基づいた記録の意味合いが強いためと思われる。書に関する記述において『源氏物語』と比較すると、フィクションのため例えば、六条御息所の筆跡は「なまめかし」というように、物語として読み手にその人物を想像し、イメージしやすいように筆跡の書風までも具体的に述べたのだと思われる。その点が、同じ紫式部が書いたものでも日記と物語の違いである。

## 二、紫式部の書道観

紫式部は、当時のすぐれた漢学者の一人であった父為時に、弟の惟規とともに広く深い漢詩文の教養を授けられ、女子ものとされていた歌書や物語だけでなく、和書・漢籍も愛読していた。そのような紫式部から見ると、清少納言の書きぶりが目に余り、

○清少納言こそ、したり顔にいみじうはべりける人。さばかりさかしだち、真名書きちらしてはべるほども、よく見れば、まだいとたらぬこと多かり。(二〇二頁)

のように、清少納言は、実に得意顔をして偉そうにしていた人で、あれほど利口ぶって漢字を書き散らしております程度も、よく見ればまだひどくたりない点がたくさんあります、という辛辣な批評になったのであろう。紫式部は、幼少のころからしっかりとした漢詩文を学び、その本質を見極めているのに対し、清少納言の表面だけで体裁を整えるような書きぶりで偉そうに得意顔をするのを批判したのである。

また、紫式部の書の見方が表わされている箇所を『源氏物語』より取り上げてみたい。(『新編日本古典文学全集12 源氏物語』<sup>(2)</sup>に拠る。以下同じ。)

ア よろづの事、昔には劣りざまに、浅くなりゆく世の末なれど、仮名のみなん今の世はいと際なくなりたる。古き跡は、定まれるやうにはあれど、ひろき心ゆたかならず、一筋に通ひてなんありける。妙にをかききことは、外よりてこそ書き出づる人々ありけれど、(梅枝)

何事もすべて、昔に比べると劣りきみで、浅薄になっていく末世だけれど、仮名の書だけは当今じつに際限もなく見事なものになってきたものです。昔の人の筆跡は、きまった書法にかなってはいえるようだけれど、ゆったりとした気持ちで十分に出ていないで、どれも一つの型にはまっ

ているものです。みごとで風情があるという点は、後の時代になつてはじめて書きあらわす人々が出てきたものですけれど、

イ 手を書きたるにも、深きことはなくて、ここかしこの、点長に走り書き、そこはかとなく気色ばめるは、見るにかどうかどしく気色だちたれど、なほまことの筋をこまやかに書き得たるは、うはべの筆消えて見ゆれど、いまひとたびとり並べて見れば、なほ実になんよりありける。(帚木)

文字を書く場合にも、深い素養はなくて、あちらこちらの点を長く引いて走り書きをし、なんとなく気取っているのは、ちょっと見ますと才気ばしって気がきいていますが、やはりほんとうの筆法を丹念に書き込み得ているのは、表面的な筆勢はないようにみえますけれど、もう一度取り上げて両方を並べてみると、やっぱり実質のあるほうに良さを認めます。

拙稿<sup>(3)</sup>でも述べたように、このように、『源氏物語』の中では、昔の人の筆跡はきまった書法で一つの型にはまっている。ほんとうの筆法は、実質のあるほうだと述べている。これらのように、『源氏物語』においては、「定まれるやうにはあれど、ひろ

き心ゆたかならず、一筋に通ひてなんありける。」という硬い書風が主だったものが、「妙にをかしきことは、外よりてこそ書き出づる人々ありけれど、」のように、柔らかな書風で表わす人々がでてきた。それは、「なほまことの筋をこまやかに書き得たるは、うはべの筆消えて見ゆれど、いまひとたびとり並べて見れば、なほ実になんよりありける。」という表面上の技術美だけでなく、書者の品格、心の崇高さまでもが内包されるような筆跡がよいとしているのである。

『源氏物語』の中で、紫式部は書においても表面上の技術美だけでなく、実質がなければならないとし、さらに、物語より、より本心が表れるであろう『紫式部日記』においても、見た目ではなく、本質を見極めるべきだと述べている。このことについて鈴木一雄氏は、「紫式部は自己にきびしい。だから同性にもきびしい。」とし、また守屋省吾氏は、

日記に見られる紫式部の自照性、自己凝視の姿勢は、彼女の先天的な性癖に因つていようが、その性癖は最大の権力と経済力によつて形造られた最高美の世界、栄華の頂上に上りつめるべきいわば約束手形ともいえる皇子を産するといった栄耀ある世界でもある彰子後宮に身を置きつつ、その世界が栄華を極める方向に進むほどわが身をその中に

没我的に同化、沈潜させることができず、逆に孤立感、疎外感をかみしめさせずにはおかなかったであろう。このような性癖はまた他をもつくづくと凝視し、その本質を見極めずにはおかない冷徹な批評精神にも通じる。

としている。紫式部の冷静沈着な観察眼が清少納言批評にもなったのである。

### 三、『紫式部日記』成立期におけるかな書道の時代性

『紫式部日記』は寛弘五年（一〇〇八）から七年（一〇一〇）まで三年間の記述をもつが、まずこの頃の書くという行為は、女性たちが女手といわれるかなを自由に書くことができたことが大きい。拙稿でも述べたように、中国伝来の漢字（男手）が日本において平仮名（女手）に昇華し、今まで男の行為だった書くということが、女も自由にできるようになり、それがこのような日記や物語を書き著すことにつながったのである。しかしながら、かな文字はあくまでも私的な文字で、消息文や和歌などに使用され人目につくことはあまりなかったが、紫式部が著した『源氏物語』や清少納言の『枕草子』のようにか

な文字を使用し多くの人がその書写作業に携わり、人々に読まれ、さらに、『紫式部日記』などの女流文学の発達へと進化していくのである。

この頃のかなについて小松茂美氏は、

この私的な「かな」は、『古今集』という初めての勅撰和歌集に正式な文字として使われることによって、公的な場所を獲得するに至った。平安朝貴族社会において絶対に欠かせない教養の一つは、美しい立派な手（筆跡）をもつことであり、手習いは日常生活の中で主要な部分を占め、そのために手習いの手本が能書家にさかんに要求されるようになった。（中略）さらに和歌の発達と、歌会の盛行という風潮を背景として、互いの美意識をかりたて競いあい、「かな」は連綿体（いくつかの文字を続けて書く）、散らし書きなどと、さまざまに発展して、実用から芸術品としての「書」に定着し、優美な名品を数多く作り上げた。

とも述べている。かな文字は、私的なものから、手習いの手本としてさかんに能書家らによって書かれ、それは調度品としても美を求められ、実用から芸術品の書へとなったのである。では、この頃に書かれていた書がどのようなものかを見てみ

ると、「綾地賀歌切」(あやじがのうたぎれ)があり、それは綾本に和歌を書写した卷子本の断簡で伝藤原佐理筆、和歌を万葉仮名の草体で書き、筆者はわからないが、書写年代は佐理(九四四～九九八)の時代と考えられている。この作品は、『白氏文集』の詩も書かれており、その部分は伝小野道風(八九四～九六六)と言われ、かなは、「古体の草仮名で、潤渇の筆を巧みに駆って、自由自在な運筆が息つくような躍動美を示している。十世紀半ばのころの稀有な遺品である。」<sup>(7)</sup>とされる。またこの作品は、最後の部分が、「秋萩帖」の原本の一部とも言われている。

図1は、万葉仮名の草体で、連綿も多いが、字形が均一で行間・字間も均等のため万葉仮名ではあるが、漢字の草書のように

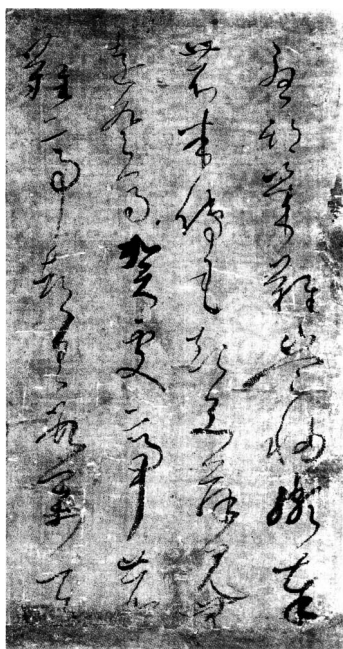


図1 綾地賀歌切<sup>(8)</sup>

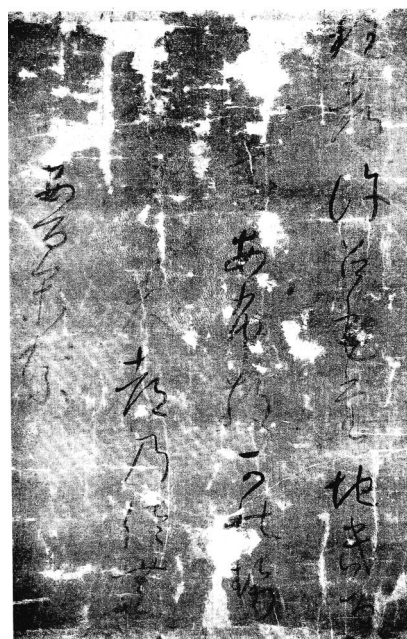


図2 綾地賀歌切<sup>(9)</sup>

にも見え、太細の変化が見られる。

この図2の最後の部分は、「秋萩帖」の原本の一部ともいわれ、図1よりも連綿が少なく、各字が孤立し、連筆は緩急抑揚の変化に乏しい。しかしながら、かな独特の柔らかさが見受けられる。

この頃の紙の扱いについて、『紫式部日記』に次のような記述がある。

A よろづつれづれなる人の、まぎれることなきままに、古  
き反古ひきさがし、行ひがちに、口ひひらかし、(二〇四  
頁)



B このごろ反古もみな破り焼きうしなひ、雛などの屋づくりにこの春しはべりにし後、人の文もはべらず、紙にはわざと書かじと思ひはべるぞ、いとやつれたる。(二二頁)

Aの「古き反古ひきさがし」は、和歌・物語・漢籍の古い書物の文字を書いた紙の不要になったものを探し出して読んだりして、Bの「反古もみな破り焼きうしなひ、雛などの屋づくりに」は、いらなくなった手紙などもみな破ったり、焼いたりしてなくしてしまい、さらに、雛遊びの人形の家を作るために反古紙を使ってしまった。童女の室内遊びの紙の人形に、紙の家や調度などを作り並べて遊んだのである。

このように、この時代は紙が貴重だったので、手紙など文字を書いた後の要らなくなった反古紙も無駄にはしないで、また読み返したり、人形遊びに再利用していたのだ。それを表わすこの時代の紙背に書かれた「延喜式紙背假名消息」を見ていく。「延喜式紙背假名消息」(えんぎしきしはいかなししょうそく)について、小松茂美氏<sup>(10)</sup>は、次のように書かれている。

かつて九条家に伝わった『延喜式』の紙背である。もと『延喜式』は延喜五年(九〇五)勅命をうけ、二十三年をかけて、編集された五十巻から成る本である。これ

は、その写本で現存最古のもの。二十八巻が現存する。じつは、これがさまざまな年紀をもつ反故を利用して、その裏面に書かれたものである。長元(一一〇二)八(一一〇三)七(一一〇三)七年間をあまり距らない時代の女手紙であることが推定される。

御堂関白道長後の華やかな宮廷文化の爛熟期をうかがうことができる作品である。「綾地賀歌切」のような草仮名ではなく、いわゆる「女手」、かなになり、連綿も多く見受けられる。

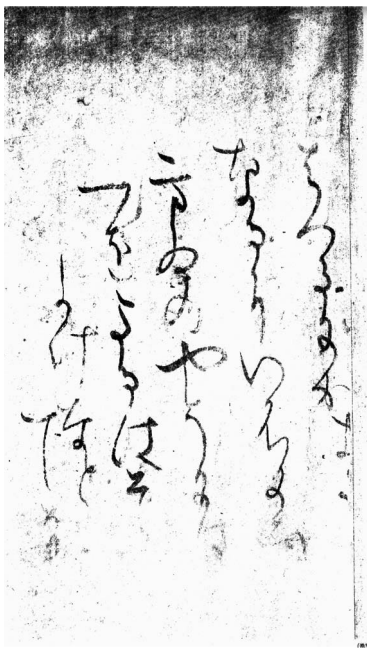


図3 延喜式紙背假名消息<sup>(11)</sup>

## 四、おわりに

『紫式部日記』は、寛弘五年（一〇〇八）秋～七年（一〇一〇）正月まで執筆されている。ちょうど『源氏物語』の執筆年（一〇〇六～一〇一一）頃である。日記における前述の②「いろいろの紙よりとのへて」③「よき薄様ども、筆、墨など、持てまゐりたまひつつ、御硯をさへ持てまゐりたまへれば、」の記述は、『源氏物語』を書く紙や執筆の様子である。④「よろしう書きかへたりしは、みなひきうしないで、心もとなき名をぞとりはべりけむかし」は、『源氏物語』の書きぶりや草稿本のことをさし、これはこの頃の書写作業の様子が、⑥「古今後撰集、拾遺抄」の歌集の書写作業とともに述べられている。また、①「濃染紙」③「薄様」⑧「白き紙一かさねに、立文にしたり」は、紙などについて、④「よろしう書きかへたりしは」⑤「書きざまなどさへいとをかしきを」⑦「延幹と近澄の君と書きたるは、さるものにて」⑩「いとこそ艶に」⑪「いと御覧ぜさせまほしうはべりし文書き」⑭「御屏風の上に書きたることを」は、書きぶりについて述べられている。さらに、この時代の書風を表わす、⑨「葦手書き」、⑫「走り書き」、⑬「真名書きちらし」、⑮「御書どもを」からもわかるように、まさにこの時代は、葦手もかなの連綿も漢字をちらすのも漢籍もすべて

が書かれていた時代であった。

この紫式部の生きていた源氏執筆年（一〇〇六～一〇一一）頃）は、その頃の書道史上から見ると、まだかなの完成期まではいっていない。実際に変化していたかなの書風を目の当たりにしていた紫式部であるから、『源氏物語』の「仮名のみなん今の世はいと際なくなりたる。」の一文は、『源氏物語』の時代設定（九〇五）を踏まえた上で、執筆している今現在（一〇〇六～一〇一一頃）に至るまで仮名が良くなってきた、というわけではないだろうか。

それは、⑦の「延幹と近澄の君と書きたるは、さるものにて、これはただ、け近うもてつかはせたまふべき、見知らぬものどもにしなさせたまへる、いまめかしうさまことなり。」のように、かなは手習いの手本に、また身近に置く鑑賞用の調度品として、作られた。これは、『白氏文集』が書かれた「綾地賀歌切」のようなものであろう。紙より高価な綾地に書かれた豪華なお手本だった。また、紫式部の時代の書風は、「綾地賀歌切」のような万葉仮名の草体で書かれた古雅な書風や、「延喜式紙背假名消息」の連綿のあるいわゆる「女手」のかなも発達していき、最も新しい書風となっていたのである。しかしながら、かなはまだ紙背などに書く私的な消息としての文字であった。漢字からかなもお手本になりつつも、かなはまだ私的

な使われ方をされていたのではないだろうか。

また、「延喜式紙背假名消息」は、文字の太細、墨の潤渇においては、まだまだ完成期と言われるような端正な滑らかさは、感じられない。特に、『紫式部日記』などが書かれていた頃のかな文字の書風は、万葉仮名、草仮名、平仮名とが混在し、変化していった過渡期の時代である。

この頃のかな文字は、まだ過渡期であり絶頂期に至っていないのだが、その紫式部の書道観とは、⑩の「いとこそ艶に、われのみ世にはもののゆゑ知り、心深き」（はなやかで、自分だけがこの世の中でもものの情趣を解し、心の深い）や⑪の「御覽ぜさせまほしうはべりし文書きかな」（お目にかけたような書きぶり）や⑫の「うちとけて文はしり書きたるに、そのかたの才ある人、はかない言葉の、にほひも見えはべる」（気軽に走り書きしても、その方面の才能がある人でちょっとした言葉にも色艶が見える）などと、文字の形という表面上の美しさだけでなく、書き手の心の艶やかで、はなやかな内面までもが表わされた表現美なのである。

かな文字は、この時代の中で紫式部をはじめ多くの女性の文字として書かれ、それが文字としてだけでなく、紙、装丁も豪華な調度品となり、書道文化として扱われるようになっていった。その普及の一つとして、文中にもあるように『源氏物語』

や『古今集』『後撰集』『拾遺集』の書写作業に因るところが大きい。読み手が多く、その書写のためにさらに多くの書き手が必要で、必然的にかな文字も皆が読めて書ける人が増加していった。そうすると、ただ書くだけでなく、より上手に書くために手習いも重要となり、お手本も多く貴族の間では豪華な調度品の手習い手本が作られるようになったのである。

さらに、この時代のかな文字は多くの人々に読まれ書かれるようになり、書風も漢字の名残りのある万葉仮名から草仮名へ、そして平仮名へと変化していった。また、文字構成も行間、字間の均一なものから、和歌における散らし書きのようなものまでに発達していくのであった。それに伴い、料紙においても白い厚手のものから鳥の子紙、色のついた薄様、そして、紙より高価な綾地にまで書かれるようになったのである。そのことが、書くという日常の書を文化として扱い、発展していくことになったゆえんではないだろうか。紫式部が、『源氏物語』を書いたことは、あのとてつもない長編の書写作業において、かなを皆に知らしめ、それを読者に普及させた功績は、この時代のかな文字の発展に大いに寄与したはずである。

これは、拙稿でも述べたが、『源氏物語』の書道観とは、文字の形という表現上の美しさだけでなく、書き手の心のありようまでもが内包された表現美なのである。それは、登場人物の

イメージとして人物像が読者に捉えやすいように、例えば、六条御息所は「なまめかし」などとした。さらに、この『紫式部日記』においては、実物の和泉式部や赤染衛門・清少納言などの人物批評の中で、「艶に」「にはひ」とし、心の艶やかではなやかな内面までもが表わされているとしている。

このように、紫式部が書いた『源氏物語』は、フィクションであるが、その中における書道観は実際に紫式部が目にした書を踏まえてである。それが、より史実に近い『紫式部日記』においては、人物批評を通した紫式部の本音の言葉で書道観を語っている。見た目の美しさだけでなく、紫式部のように、深い知識と幅広い教養に裏打ちされ、内から表れ出るような心の美しさが文字にも表現される、それが書の美なのだ。これこそが、紫式部のいう書道観である。

さらに、書についての記述が、他の平安文学にも見られるのかを今後検証していきたい。

# 註

- (1) 藤岡忠美・中野幸一・犬養廉・石井文夫校注・訳『新編日本古典文学全集26 和泉式部日記・紫式部日記・更級日記・讃岐典侍日記』(小学館 一九九四年)
- (2) 阿部秋生・秋山虔・今井源衛・鈴木日出男校注・訳『新編日本古典文学全集12 源氏物語』(小学館 一九九六年)

- (3) 拙稿「平安文学におけるかな書道——『源氏物語』にみられる書道観と時代性——」(佛敎大学大学院紀要『文学研究科篇』第三九号 二〇一一)
- (4) 鈴木一雄『王朝女流日記論考』(至文堂 H五)
- (5) 守屋省吾『紫式部日記』の形成に関する試論(梅光女学院大学『国文学研究』第六号 S四五)
- (6) 小松茂美『日本書道説林(上巻)』(講談社 S四八)
- (7) 小松茂美『日本名跡叢刊 平安 絹地切 綾地切』(二玄社 一九八四)
- (8) 図1註(7)に同じ。
- (9) 図2註(7)に同じ。
- (10) 小松茂美『日本名跡叢刊 平安 假名消息』(二玄社 一九八六)
- (11) 註(10)に同じ。

(なんじょう かよ 特別研究員)

## 〈Summary〉

### Kana calligraphy in Heian Period Literature: Historical context and the Outlook on Calligraphy in the Diary of Murasaki Shikibu

NANJO Kayo

In the looks “The Tale of Genji” and “The Diary of Murasaki Shikibu”, we can find a lot of descriptions about calligraphy. From these we can see how Murasaki Shikibu, who had a profound knowledge of calligraphy, thought of it, and at the same time how calligraphy was used in their daily lives in the Heian period. However, we wonder what style of writing, especially in KANA (a kind of Japanese calligraphy), it was in the history of calligraphy.

In this essay I’m going to state what character the Heian period had and how calligraphy was evaluated as culture: in particular what position calligraphy held in the Heian period. To make it clear, I take up paper, tools, letters, ways of writing and ways of imitation. I also pay attention to how Sei Shonagon criticized writings found in “The Tale of Genji” and “The Diary of Murasaki Shikibu”.

**Key words:** the Diary of Murasaki Shikibu, the Tale of Genji, Sei Shonagon, Calligraphy, KANA